日本基督教団 八ヶ岳教会　聖霊降臨祭 主日礼拝　 NO.1384　2025 年 6 月 8 日 10:30～

前　奏		讃 美 歌	499 みたまよ、くだりて
招　詞	ヨエル書 3:1~2	聖 餐 式	
讃 美 歌	73 くすしきかみ、たえなる主よ	讃 美 歌	203 しずけくやすけき
祈　禱		献　金	
信仰告白	使徒信条 566	讃　詠	547 いまささぐるそなえものを
聖　書	出エジプト記 20:18~19	黙　禱	
	使徒言行録 2:1~8	主の祈り	564
讃 美 歌	177 かみのいきよ	讃　詠	546 聖なるかな、せいなるかな
説　教	『聖霊による、ひと言、ふた言』	祝　禱	
祈　禱		後　奏	

五旬祭、集まっていた一同は、天からの嵐のような音を聞いた(使徒 2:1~2)。すると「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった(2:3)」。この情景を実際に思い描けば怪奇現象で、うわぁ怖ろしいと腰を抜かすだろう。だから象徴的な意味として、受け留める事柄なのかもしれない。

「すると、一同は聖霊に満たされ、〝霊〟が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした(2:4)」。諸外国の言葉で話し出した者は皆、ガリラヤの無学で素朴な人だった(2:7)。かつて私が出会った多言語の最大話者は、アジアキリスト教協議会の Dr.カーで 13 カ国語。でも日本語は通じなかった。

実に多様な言語が示される(2:9~11)。セム語系、ペルシャ語系、ギリシア語系、ラテン語に分類できるか。しかし「炎のような舌」が語らせている言葉を、泥酔者のヘベレケ語だと言う者もいた(2:13)。酔っ払いのヘベレケ語を「どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか(2:8)」と驚くとは、「信心深いユダヤ人(2:5)」にも聖霊が降っているらしい。語る者だけに限らず。

ガリラヤの素朴な「彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは(2:11)」と人々は皆驚きとまどった(2:12)。すなわち信心深いユダヤ人は、聖霊の業が自分たちにも働いていることに気づかないまま、「神の偉大な業」を聞いていた。「炎のような舌」が現れる劇的な情景を、私たちが見ることはおそらくないだろう。遭遇すれば怖い、が、見てみたい。ほとんどの場合、信心深いユダヤ人のように、無自覚なまま聖霊を己が身に受けている。むしろ聖霊の働きに自覚的だと、かえって問題が起やすい。「これは聖霊、これはそうではない」と思い込みで決めてしまうからだ。

「聖霊によらなければ、だれも〔イエスは主である〕とは言えない(Ｉｺﾘﾝﾄ12:3)」。私たちは「イエスはキリスト」だと告白する。つまり私たちは、無自覚なまま聖霊の働きの中にいる。「賜物にはいろいろあるが、それをお与えになるのは同じ霊(12:4)」。そして多様な賜物が示される(12:8~10)。無論これだけに限らず、一人ひとりに聖霊の賜物がある。「これらすべてのことは、同じ唯一の〝霊〟の働きであって〝霊〟は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださる(12:11)」。あの炎の舌のように。

炎の舌(使徒 2:3)に目を奪われて、家中に響いた轟音(2:2)は見落とされがち。遠い昔のあの出来事も轟音だった。「民全員は、雷鳴がとどろき、稲妻が光り、角笛の音が鳴り響いて、山が煙に包まれる有様を見た(出ｴｼﾞﾌﾟﾄ20:18)」。イスラエルの民に十戒が授けられる状況。後代ユダヤ教ラビの伝承にはこうある。「十戒はただ一つの音で発布され、すべての民がそれを理解した。その声は十に分かれ七十の国語になった」と。説明ではない「ただ一つの音(聖霊)」で十戒が発布される。これは腑に落ちる。

「炎のような舌」聖霊は、私たち「一人一人の上にとどまっている(使徒 2:3)」。私たちは日本語で、各々の訛りや偏りで、「神の偉大な業(2:11)」を語る。そして聞く。素朴なひと言、ふた言で充分。

ひと言　ふた言でいい　そこに神の偉大な業が凝縮されているからではない　むしろ空っぽだろう みっちり説明されても　燃え上がらない　必要なのは虚空　そこへ聖霊の小さな火種が投じられる
6/11(水)12:00～2:00 エステル会。6/14(土)1:30～３:00 聖研・祈祷会。6/16(月)10:00～11:30 八ヶ岳教会の甲府聖研(YMCA にて)。6/18(水)1:00～3:00 教会カフェ(1:30～2:00 聖書のおはなし)。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3
連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324　 TEL 0551-25-4008
ﾒｰﾙkomechan.olive @ gmail.com　 HP は「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。